

*** 昭和24年10月1日発行科学朝日記事「緯度観測50年」をアーカイブ**

2009年12月のアーカイブスシンポジウムに参加された「渋谷星の会」の小川氏から昭和24年10月1日発行の科学朝日に「緯度観測50年」の記事があると見せられた。緯度観測所は1899年設立である。1999年に100年を記念して「緯度観測100年」(写真1)が刊行されている。

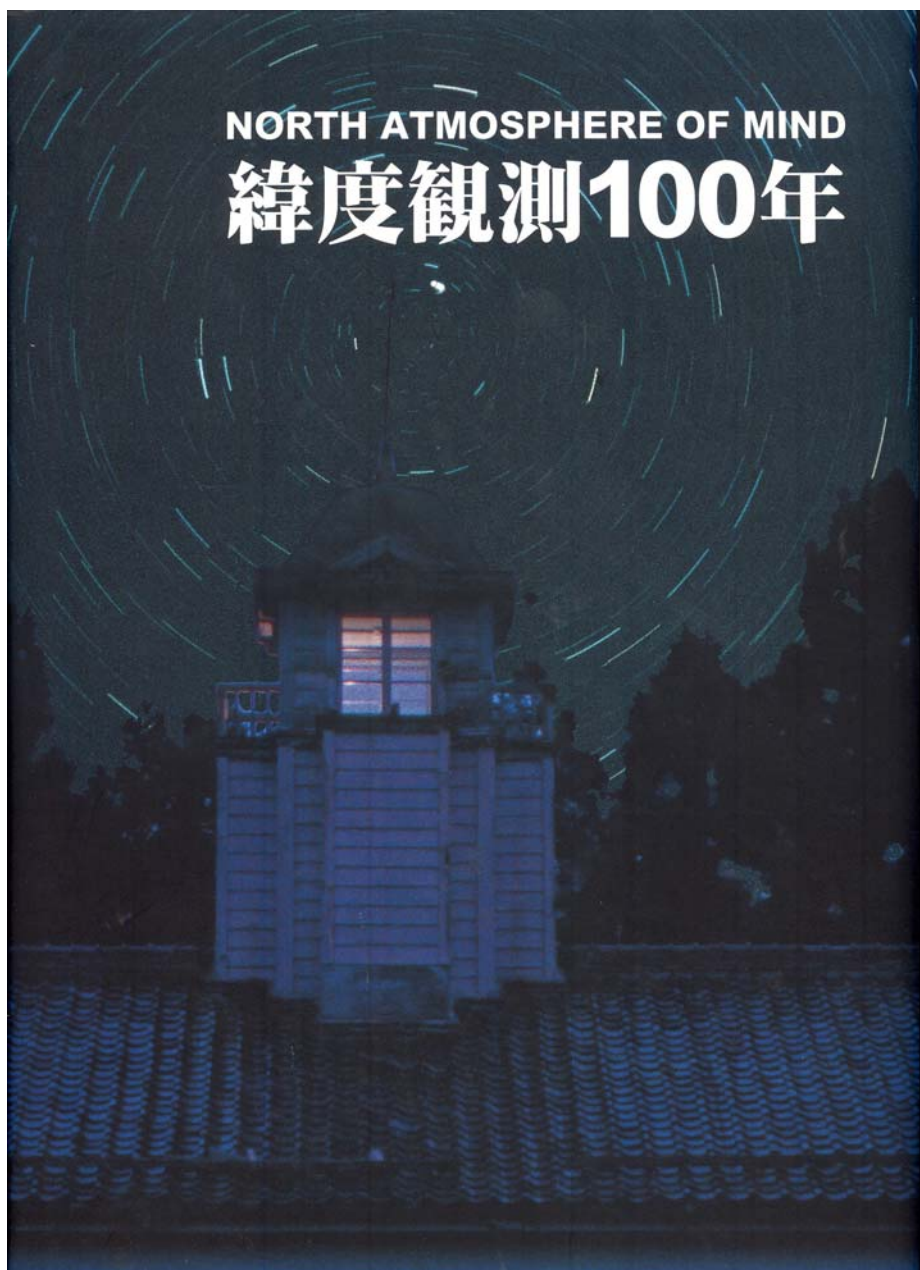


写真1 「緯度観測100年」の表紙

緯度観測所は長らく文部省直轄の研究所であり、1899年に地球回転変動の解明を目的とした緯度観測の国際協力事業として始まったものである。初代所長 木村栄の「Z項の発見」はあまりにも有名であり、文化勲章第1号受賞者である。筆者は緯度観測とは関係がなかったし、定年まで緯度観測所を訪れることもなかったから緯度観測所について語る力量はない。

写真2は、科学朝日の昭和24年10月1日号に載ったグラビア写真の一部である。



写真2 グラビアの緯度観測所の様子

緯度観測100年の冊子も、この記事も緯度観測50年となっていて、緯度観測所100年史でもなく、緯度観測所50年の記事でもないのは少し奇妙なように思える。

写真3は当時の緯度観測所の様子である。2万坪の広大な敷地である。

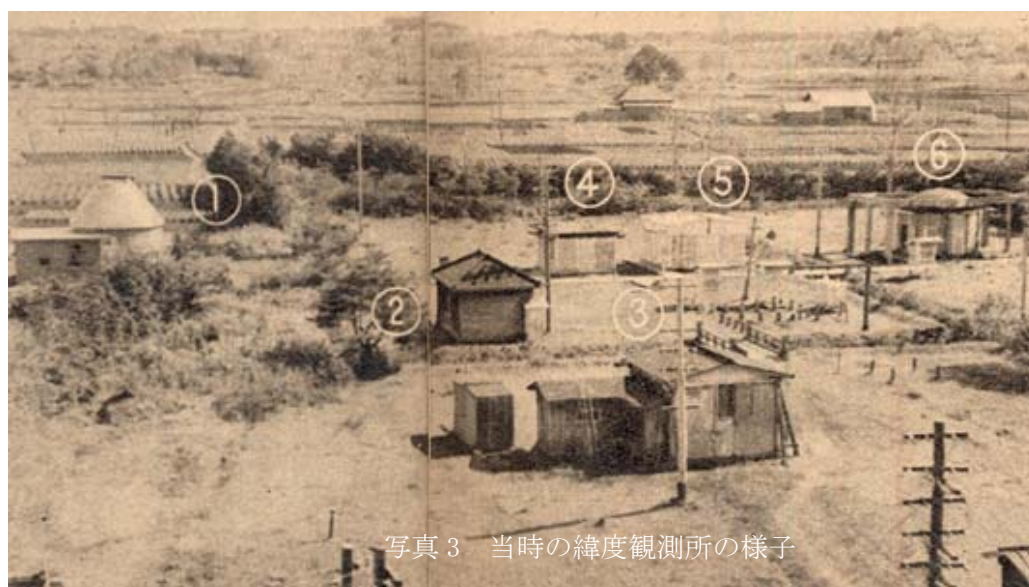


写真3 当時の緯度観測所の様子

筆者は、長らく東京天文台職員であったが、天体物理学系において、位置天文学系の緯度観測所とは縁がなかった。定年前に緯度観測所を訪れる機会がなかったのだが、どういった巡り合わせか、定年後何度か訪れることになった。それは定年後、天文情報センターに入り1号官舎を三鷹市の絵本の家に譲る話に関わるようになったのが縁であった。三鷹の1号官舎を譲渡する件の先輩格として、緯度観測所の旧本館が奥州市に譲渡されたときの事情調査に加わったからであった。そして、偶々訪れた緯度観測所の現在の本館が耐震強度化工事のため、館内の物品の整理が行われており、アーカイブの仕事を始めていた筆者にとって千載一遇の機会だったのである。博物館関係者が言うには、博物館への収蔵品を得るチャンスは建物取り壊し、あるいは耐震工事がチャンスであると！

緯度観測所と全く縁のなかった筆者が、緯度観測所に残っていて、三鷹に全く残っていなかったマイクロフォトメーターを廃棄寸前で譲渡いただけたことは幸運であった。また、緯度観測所を訪れた際、国立天文台最古の望遠鏡（実は最古ではないようだが）といわれた1875年製のイギリスのトロートン・シムス製の経緯儀とほぼ同型機が完全な原型を留めて存在していたこと、また日本に2台輸入されたフランス製のプラン子午儀が存在しているのを目にした感激は今でも忘れられない。

写真4は浮遊天頂儀である。昭和24年にすでにこの望遠鏡が緯度観測所にあったことにも驚いている。この望遠鏡も今はすでに使われておらず、展示室入りになっている。

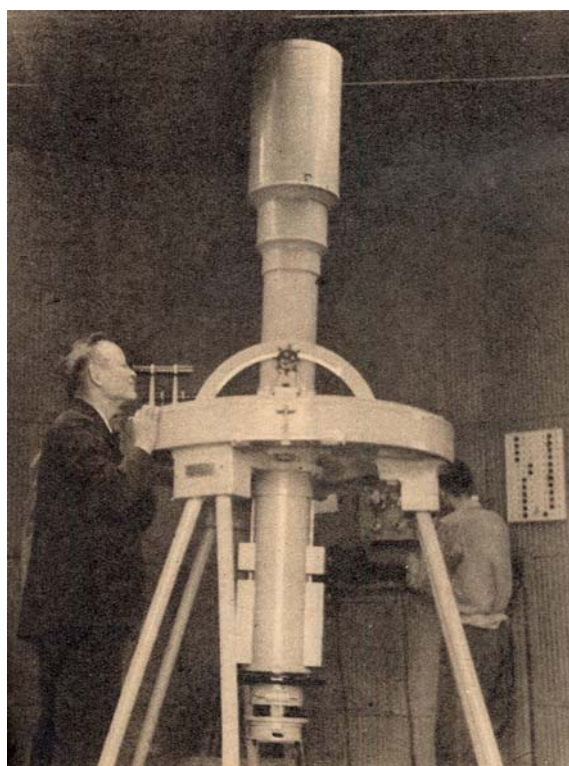


写真4 浮遊天頂儀



写真5 天頂儀

写真5は、天頂儀である。三鷹の聯合子午儀室になったと伝えられる天頂儀の行方は知れないが、この写真に写っている天頂儀は水沢に健在である。

写真 6 はバンベルヒ子午儀である。この子午儀は奥州遊学館となった旧緯度観測所本館に展示されている。

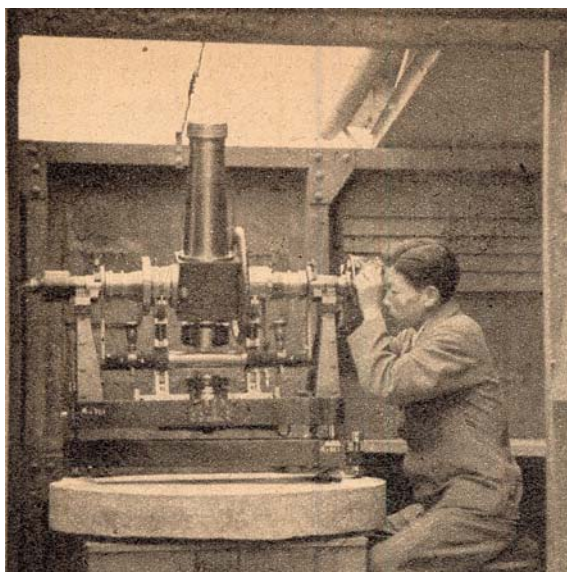


写真 6 緯度観測所の子午儀

グラビアには、初代所長 木村栄、2 代所長 川崎俊一 当時の所長 池田徹郎氏の写真が載っている (写真 7)。



初代所長木村 栄氏

2 代目所長川崎 俊一氏

現所長池田徹郎氏

写真 7 元、現所長 3 氏

今年 は 2009 年である。緯度観測所発足から 110 年、この記事から 60 年を経ている。この記事が書かれた昭和 24 年には乗鞍コロナ観測所が発足している。この号に時の所長池田徹郎の長文の記事がある。書かれてから 60 年、全てをアーカイブしておこう。